●金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会・会報誌「やまざと」VOL. 22……THE・チョンボ号 2008 年 6 月

08 年 9 月 14 日 KUWV 創立 50 周年記念パーティ案内号

「大笠山で出会ったカモシカ君」　21 期　竹中びん（イラストと文）

ある雪晴れの日、大笠山を望む尾根でカモシカ君と出会った。山に暮らす彼は一生のうちで、いったいどれだけの生き物と出会うのだろうか。寂しいと思う時があるのだろうか。

ぼく達人間は、街で大勢の人達とすれ違いながら、それぞれ自分達の世界の中で暮らしている。けれども、ぼく達はその人達と知り合うことも、同じ価値観を共有することもないだろう。大勢の人達の中にいても、決して知り合うことのない淋しさの中で生きているのだ。

でも、あの時、ワンゲルに集まった仲間は、共通する価値観を持つことができた。喜びや楽しみを分かちあえる世界が多いほど、人は豊かな気持ちになれるような気がする。

大笠山で出会ったカモシカ君は、ぼくにとっても、心豊かにしてくれる思い出として、今も生きている。

特 集

愛しのチョンボたち

やまざと

「やまざと」VOL. 22　愛しのチョンボ ＆ KUWV創立50周年記念パーティ案内号

◎表紙　大笠山で出会ったカモシカ君――21期・竹中　敏（イラスト＆文）
やまざと　題字―― 23期・中川晃成

1p　KUWV創立50周年記念パーティのご案内――20期・久富象二

2p　金沢大学ワンダーフォーゲル部創立50周年を迎えて――19期・栂　典雅（OB会会長）

●顧問・前顧問の先生方から
3p　50周年おめでとうございます――竹内義晴　先生
4p　ワンゲル顧問と事故――前田達男　先生

●特 集　愛しのチョンボたち
6p　我が胸に人に言えざるチョンボあり「カリントウ篇」「千歳篇」―?期・砂糖和菓子
8p　留年…ああ、切なきかな僕のチョンボ！――20期・松下和隆
9p　「ああ、槍ヶ岳」――?期・匿名希望女子
9p　恐怖の小桜平避難小屋――19期・N. T.
10p　老いのチョンボ――15期・舟田節子
14p　今でも忘れられない私のチョンボ――22期・森　恵利子
14p　チョンボしなくてよかったこと～頂上目前の下山～ ――26期・畠山　潤
15p　新宿駅まで乗り越したリーダーの山靴――20期・久富象二
15p　ポールを忘れたこと、そしてほんとの最大のチョンボは… ――46期・杉村明慶
16p　今だから笑える30年前のチョンボ――23期・鳥越伸博

17p　目で見るベルクハイム――11期・加藤忠好

●メール宅急便　「寄 稿」
19p　東京マラソンを走るの記――6期・合津　尚
20p　ネパール展始末記――15期・舟田節子
27p　田村大兄 雑感あれこれ――3期・田村昭夫
28p　ＧＷ春スキー！　妙高・火打連峰スキーツアー報告――11期・青柳健二

32p　2007年 OB会会計報告――23期・鳥越伸博

33p　ＯＢ有志たちのランタン・フラワートレッキング12日間――15期・舟田節子

●おお、小屋酒場
50p　07年秋――15期・舟田節子・佐野哲雄　16期・北川隆次　6期・合津　尚　11期・加藤忠好
58p　08年春――15期・奥名正啓
60p　女史のコトバ、信ずるべからず… ――7期・吉村弘二

61p　07・08年 現役活動報告――22期・森　恵利子
62p　50期主将の挨拶――50期・大和英仁
63p　51期主将の挨拶――51期・浦地好古

金沢大学ワンダーフォーゲル部　創立５０周年記念総会・懇親会

標記の総会・懇親会を下記のとおり開催いたします。出欠は同封のハガキでお知らせ下さい。多数ご参加いただきますようお願いいたします。

20期　久富　象二

記

日　時	２００８年9月１４日（日）	１５時３０分	受付
		１６時　～　１７時	総会
		１７時　～　１９時	懇親会

場　所　　金沢市大手町２－３２　KKRホテル金沢　TEL ０７６－２６４－３２６１
（金沢城公園大手堀前）

会　費　　６，０００円（当日徴収いたします）

9月１４日にKKRホテル金沢で宿泊を希望される方は、同封のハガキでお知らせ下さい。（シングル朝食付で7,000円　３０室を仮予約してあります）

※　出欠ハガキの締め切り　　7月３１日

※　参加希望者にはスケジュール等の詳細なご案内をお送りします。

9月１５日（月）　医王山メモリアルトレッキング

８：３０	KKR出発（バス、宿泊者のマイカー）
９：００	金沢大学駐車場集合
９：３０	医王山ビジターセンター着・発
１２：００	白兀山頂で昼食
１４：３０	医王山ビジターセンター着・解散
１５：３０	KKR着（バス、宿泊者のマイカー）

＊　朝食は各自でお願いします。昼食・行動食は用意します。

＊　参加費用は当日徴収させていただきます。

＊　コース等は変更になることがあります。小雨決行。

日光を浴びよ　自然に親しめ
浩然の気を養え　民謡を唄え
山に登れ　伝説を取りもどせ
祖国の土に芽ぐむ魂を思え
そしてさらに
身体を健全にし　厳格にして自己を訓練し
青春の精力を濫費するな　（創立モットーより）

金沢大学ワンダーフォーゲル部創立５０周年を迎えて

ＯＢ会会長　　栂　　典 雅（19期）

金沢大学ワンダーフォーゲル部が半世紀に及ぶ歴史を刻んできたことに、今あらためて感慨を深くしているところです。

高度経済成長期、バブル経済の崩壊、そして就職難、学生気質の変化・・・。こういった日本の社会の変動がワンゲル活動にも大きく影響していることは、いまさら言うまでもありません。

思い返せば、我々現役員が現役だったころが最も部の規模が大きく、部員数は９０名を超え、体育会系ではもちろん、大学の全サークルにおいても一，二を争うほどでした。それが、いわゆる３Kが嫌われる風潮から部員数が減り続け、特に女子は学年に１人もいないという期もあったと聞いています。しかし、近年は部員数も漸増し、女子が主将を務めることもあたりまえになっているようです。

一方、ＯＢの数は500名を優に超え、その年齢構成で言えば、すでに三世代に及んでいます。このようなＯＢ会をまとめ、運営していくことは容易ではなく、明確なビジョンは持ち合わせてはいないものの、今後は旧来とは異なるやり方、システムにシフトしていかざるをえないのではないかというのが、いまの偽らざる心境です。

このような状況のなかで、関西や関東などの地域ごとに一線をリタイアされたＯＢの方々が中心となり、活発な活動・交流が行われるようになってきたことは、たいへんに喜ばしいことであり、ひとつの方向性を示しているのではないかと考えています。

さて、この５年間、我々役員の力が及ばず、ＯＢ会員諸氏にはなにかとご不満もあったことと存じます。ここにお詫びを申し上げる次第です。しかしながら、なんとか会を維持し、５０周年の記念行事に向けて準備を進めているところです。

また、僭越ながら、５年前の総会において提案をさせていただいた５０周年記念の「歌」もカタチになってまいりました。つきましては、「金大ワンゲルOB会愛唱歌」（案）として、次の総会でご披露をさせていただき、ご承認を賜ればと思っております。

いずれにいたしましても、会員諸氏におかれましては、次の総会・記念行事への多数のご出席をお願い申し上げまして、巻頭のごあいさつとさせていただきます。

金沢大学ワンダーフォーゲルＯＢ会 愛唱歌（案）

♪森のうた

一、
キミは憶えているかい？
雨あがりの森のにおい
氷りだす月
オレンジに染まる谷 くだったこと

ボクは　ほしい
雲のように
変わりつづけるこころ

二、
ボクは持っているかな？
峰の奥の空の深さ
鳥の孤独
あの山でキミがつぶやいた言葉

ボクは　ほしい
オオシラビソの
立ちつくす激しさを

三、
キミは知っているかい？
にこ毛 そよぐブナの森を
山靴の夢
倉谷のタムシバの花の白さ

ボクは　ほしい
カタクリの
日なたに躍る気持ち

顧問の先生方から

５０周年おめでとうございます

竹内　義晴

４９年目から顧問をしている竹内です。集団行動が苦手で、山に行っても、どこかの大学のワンダーフォーゲル部なんかがいると近寄らないように休憩をとったり、別の道を選んでいた私が、何の因果か、ワンダーフォーゲル部の顧問になりました。しかし、性格ですから、顧問になっても、山は一人で楽しむものだという考えは変わりません。

山は基本的に一人で楽しむものですが、危険の伴うことですから、仲間がいて、技術を高め、教え合い、また力を合わせて行動することが大切なことはよくわかります。しかし、それであっても、私は私であって、あなたや彼、彼女ではないですから、楽しむのは一人の私ですし、その行動の責任もまた私一人にあります。

山を楽しむ人間だったら誰にでもわかってくる、個人主義のきびしさの話になってきました。個人主義のきびしさがあってはじめて、集団行動もその真価というものを発揮できるのでしょう。山での集団行動に、しごきやいじめ、危険行動などの暴走があるとしたら、それは集団の構成員、特にリーダーに個人主義の厳しさが欠けている、つまり甘えがあって、状況を正確に把握できないからだろうと思います。甘えが出てくるというのもまた、私たちの拭いがたい本性ではあるのですが。

しかし、顧問になってわかってきたのですが、金沢大学のワンダーフォーゲル部には、そのような甘えを排除する努力を重ねてきた素晴らしい歴史と伝統があるようで、これはうれしい見当違いです。他方、その素晴らしさを、技術面においても、精神面においても、正当に引き継いでいくことがなかなか難しくなっていることも現実です。しかし、顧問として、現役の安全で充実した活動にいくらかでも貢献でいたらと考えていますので、言葉足らずですが、OBの皆さん方のサポートをよろしくお願いします。

（　現顧問　　２００８年度～　）

元顧問　前田達男先生から

ワンゲル顧問と事故

前田　達男

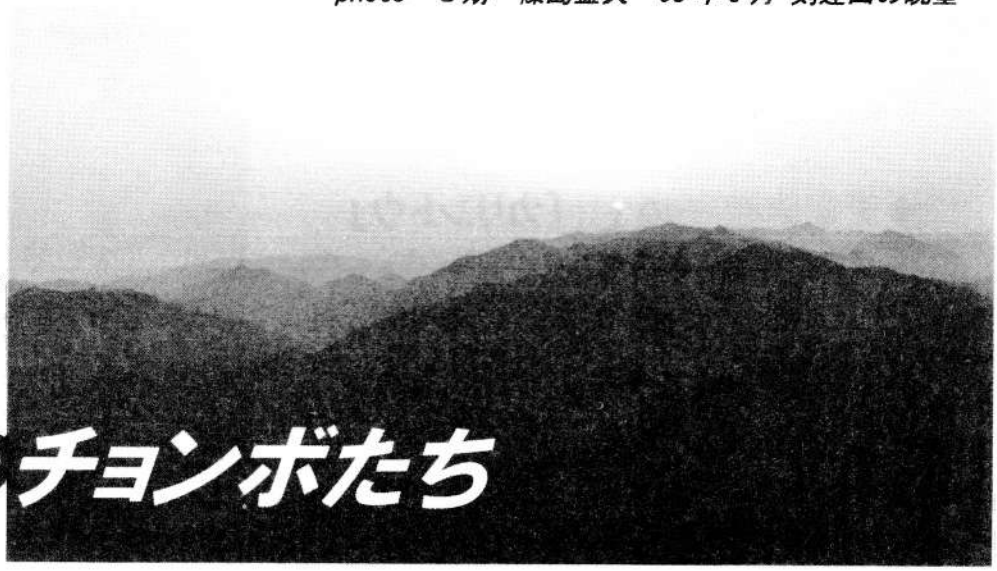
2007年3月末で定年退職となった（国立大学法人化後は「退官」とはいわない）。「定年退職おめでとう」と言われると抵抗感もあるが、無事に定年まで勤めることができたことがめでたいと言われているのだ、と解釈することにしている。もっとも、大学の勤めのほうは、理学部の入試ミスの際、全学の入試運営委員会委員として職務怠慢であったと厳重注意のお叱りを受けた以外、何事もなかったが、ワンゲルのほうはそうでもない。

顧問就任の翌年、見越山での滑落（夏合宿トレ、自衛隊ヘリ出動）、続いて、犀奥・倉谷川での転落死（卒論事前調査、大々的な捜索）、犀奥テン場での火傷（新トレ、金大病院で形成手術）、針ノ木谷で指を失いかけた事故（PW、黒四ダムの船出動）、剱岳での落石による転落・出血死（PW、救護隊・県警ヘリ出動）などがすぐに思い出される。ただ、霊前に線香を供え、医師から話を聞き、関係方面にお礼と報告に出向くことはあっても、記者会見で頭を下げ、不祥事のお詫びをするという場に登場することはなかった。

事故はもちろん起して欲しくはないが、何かを為さんとして迷い、ミスをするのが人間である。Es irrt der Mensch, solange er strebt.(Goethe:Faust)　何もしなければ事故もないが、そんな顧問は面白くない。金大のワンゲルは、時々（小さな！）失敗はするが、登山道の整備など社会貢献でも頑張っている、山・ロードで会っても好感のもてる若者たちだ、と皆から弁護してもらえる、そういうワンゲルをこれからも見守っていきたいものだ。

（金沢大学名誉教授、顧問1976～1987、1989～2007年度、
1988年度はドイツ留学）

photo　8期・篠島益夫　08年5月 剣連山の眺望

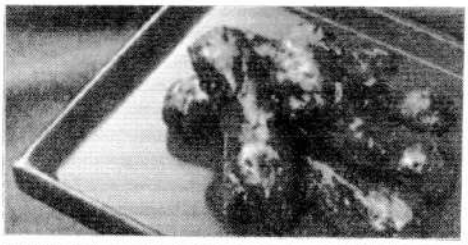


特集
愛しのチョンボたち

１年装備係のＴクンが、ガスボリを忘れ、
一泊のワンデリングで帰ってきた「北ア燕ＰＷ」。
しかし、そんな状況下でも
Ｋリーダーは、焦らず、騒がず、やさしく微笑み、
１年Ｈクンは、拳を後ろ手にかくし、
ボクは、遠く燕のピークをただただぼんやり望むのでした。
チョンボは、かなしい。
チョンボは、怒り。
チョンボは、悲惨だ。
でも、いつだってボクたちは
チョンボを笑い飛ばしてきたじゃないか！
チョンボをエネルギーに変えてきたじゃないか！
心根ふかきワンダラーたちの度量で…。

（19期　M.O談）

《我が胸に人に言えざるチョンボあり



◆チョンボ その１ 「カリントウ」

私は便秘とはあまり縁がない。快食快便。その消化器の分解能力はギャル曽根ほどではないが、これは雪山では不向きだ。

１年の冬合宿だったと思う。朝出発して１回目の休憩タイム。いつものように食べたらすぐに出したいので、そこらへ雉撃(きじう)ちに行きましたとさ。

（雉撃ちというのは男性用語で、女性には違和感ありです）

辺り一面のまばゆい白銀の世界。隠れる茂みはないし、遠くに行くにも時間がないし怖いし。適当なところでしゃがんで“おはようのうんこちゃん”。ごめんね。真っ白な、純白の完璧なる地に汚物をおいて。でもねぇ、これもそのうち肥やしとなり何かの役に立つ。エネルギーの循環だ。遠くの山々の美しい景色を見つめ、身も心もすっきりしました。

でも、傍らを見ると××君が立っているではありませんか。彼もまた遠くを見つめて（？）排泄行為をしていました。“うそー。”“××よ、いつからいたんだ？”“降臨したんか？”ただただ狼狽して無言のまま、さっさと列に戻った私です。ここまでは××のチョンボだと思う。でもここからは私のチョンボ。

２回目の休憩タイム。後の２年男子のヒソヒソ話が耳に入ってきた。

「さっきまでは無かったよな。茶色の足跡。」

「うん。・・・どっちかな。」

「どっちだと思う。・・・」

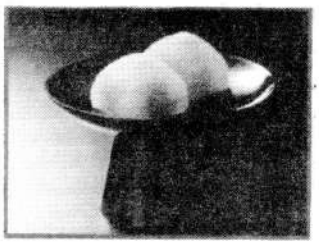
疑われているのは、もちろん先頭を歩く先輩と２番目を歩く私。

あんまりあたふたしたので、うっかりうんこちゃんを踏んでしまったことも気がつかなかったようだ。当時 18 歳のうら若き乙女は「すみません。それは私です。」とは口が裂けても言えず、ひたすら聞こえないそぶり。靴底を拭うこともできず、自然消滅を願いつつとぼとぼと歩きました。

『雪山の合宿なんかキライダ～～イ！』

忘れたころに　乱したる君》

？期　砂糖 和菓子(さとう わかこ)



◆チョンボ その２「千歳(ちとせ)」

さっきのチョンボは半ば天災。今度のは完全人災。２年生のＰＷだった。

金沢には“お菓子をあげたりもらったりの繰り返し”という変な風習があるところで、なにかしら家にはいつも和菓子がころがっていた。

出がけにめずらしく母が「森八の千歳もってくか。」と６個パックを手渡してくれた。皆で食べれば、という意味かなとザックに入れた。

そのＰＷは海あり山あり島ありと変化に富んだ面白いものだった。何日目かに雨が降って１日中小屋で沈殿した。みんな、それぞれシュラフの中に入り１日中ゴロゴロしていた。リーダーさんの頭の中はこれからの日程調整とかいろいろあるかもしれないが、私には“そんなの関係ない”。何にもすることがなく、時間だけがゆっくりと流れ、かったるいけど幸せな繭の中。

その時、千歳を持ってきていることを思い出した。

「ねぇ、お菓子があるんだけど食べる。」

というのが普通だが、ひみつの和菓子ちゃんはそんなことはない。

幸せそうなそれぞれの繭の中をこじあけるのもかったるいし、甘い物の誘惑もまさり、こっそり１つ食べた。

たちまち脳内を走るセロトニン。“おいしい！”

もう１つ食べた。

だんだん胃袋がゲッツリしてきたけれど、結局のところ６個とも完食しました。

・・・さもしいよね。ワタシ。

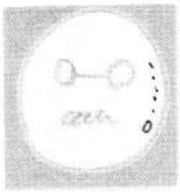
今思い返せばシュラフの中は個室。

１つテントの中も楽しいけれど、個室もほしい。

個室の中に密かにカステラとかまんじゅうとかにおいも音もしないお菓子を常備しておいてもよかったかも・・・。

冬眠中のリスのように幸せだったかも・・・と思います。

『これってチョンボじゃないよね！』



留年・・・ああ、切なきかな僕のチョンボ！

タラ～

20期　松下和隆

女房が言った。「あなたのチョンボは何かって？　そりゃ、留年でしょうよ。たしか、２回だったわよね」。

うっ！　俺のトラウマに触れてくれるな（今の僕は、大学生の息子に、留年するなとは言えないでいる）。

僕は、大学を６年かけて卒業した。教養から専門にあがるときに１回、ほいでもって、卒業直前にまた１回、合わせて２回留年した（こんなもん、合計なんかせんでええわ！）。

１回目の留年は、晴天の霹靂（ヘキレキ）のごとく僕を襲った。秋の「小屋作業」を終えて、ワンゲルの部室に戻ったとき、Ｍグチ先輩がニヤリと笑って、僕を迎えた。

「俺たちの学科（物理学科）は、難しいぞよのぉ～」

Ｍグチ先輩は、御自ら、ご留年をご経験あそばされた方だ。それだけに、そのお言葉には、ただならぬ重みがあった。ドキ！

僕は、直ちに理学部の玄関へと走った。ない。進学者リストに、僕の名前が…オー、マイゴッド！　なんでだよ。なんで倫理（２単位）ポッキリで、留年になるんだよ！

不条理を感じた僕は、鎧（よろい）教授の部屋へと赴いた（もう３０年も昔のことだから、実名だしてもいいよね）。

「先生！」

「なんじゃ」

「傲慢について書け、とおっしゃいましたよね。だから僕は、サルトル的解釈について、答案用紙（わら版紙１枚）の表にも裏にも、びっしりと書きました。不可の理由は何なのでしょうか？　僕は、この倫理のみで留年なんです。ご見解を、ぜひ聞かせて下さい」

僕は、教授に詰め寄ったのだった。すると教授は、意外な様子で、

「えっ、そうなんや？　そりゃ、すまんことした。教務に掛け合ったる。それで、えーかのぉ」

……！？　僕は、拍子抜けした。合否判定の説明如何によっては、刺し違える覚悟だった。しかし、不可を出した教授本人が、教務と掛け合ってくれるという。そんなら、まっ、いっか。そう思った僕は、その場をあっさりと後にしたのだった。当時の僕は、まだ紅顔のウブな青年だった。

３日後、連絡がないので、また教授の部屋に赴いた。

「あっ、あの件ね。だめだってよ。教授会で、私が頭さげなあかんのやわ。　ちょっとそこまでは、でけへんわ」

やられてもーた。おお、これぞまさに、「ガス抜きの術」だ（実は私も、会社でよく使う術である）。僕は、若くして、その術中に入ったのだった。

僕は、もうアホらしくなって、それ以上追及する気が失せていた。

結局、「不可の理由」は分からずじまいである（今となっては、もう、どうでもいいことですが…）。

その昔、西田幾多郎が、学生の答案を階段からばらまいて、遠くから順番に、優、良、可、・・・と採点したという。

我が母校、金沢大学には、この伝統が脈々と受け継がれているやも知れない。

この留年のおかげで、今の僕は、晩年の西田幾多郎、その心境地に近づくことができた。

人は人　吾は吾なり　とにかくに
吾が行く道を　吾は行くなり

今回はこれで、おわり、です。

あっ、そうそう、留年２回目の理由は、何かって？　それは…、またの機会にします。

「ああ、槍ヶ岳」

匿名希望女子

チョンボかぁ、私何かあったかな？　チョンボがないのがチョンボだったかなあ、なんて単に忘れているだけ、思い出せないのです。

そういえば１年の冬山合宿で水濾し用のガーゼ忘れて冷や汗、TP を幾重にも重ねて代用し、難を逃れたことがあったけど・・・ちっぽけだ。

そうだ、恥ずかしかった思い出でチョンボの代わりにしよう。

１年生の夏山合宿で憧れの「槍ヶ岳」を目指していたときのことです。

１年生の私はセカンドで黙々とピーク目指していました。これが槍か、さすがに岩だらけ、でも案外近いなんて思いながら岩場に足をかけては登っていくうちピークに到着。やったー！！とそれなりの感激に浸ろうとしている私に、後ろを歩いていた N 君が恥ずかしそうに小声で知らせてくれました。「おい、ズボン破れとるぞ」

名峰槍ヶ岳の思い出がガラガラと崩れ、破れズボンの思い出となった次第です。

恐怖の小桜平避難小屋

１９期　N.T.

ぼくが、初めてリーダーをした秋の白山 PW。明日は岩間温泉に下山という小桜平の夜。わずかのアルコールはすぐに底をつき、番茶を飲んでは盛り上がっていた。

何度目かのお茶を沸かそうと、食料係の K 嬢（としておこう）は、ポリタンの“水”をコッヘルに空け、音を立てて燃えるブスに乗せた。と、立ちこめるガソリンの臭い？

「火を消せぇー！！！」　あと何十秒かいや数秒かも・・・遅かったら、小桜の小屋を全焼していたに違いない。ちなみに、小さな避難小屋でも、資材をヘリで空輸するということもあって、建築費は２～３千万円にもなる。

「在りし日の」にならずに済んだ小桜平避難小屋

番茶の酔い？もいっぺんに醒めた恐怖の夜であった。

余談になるが、小桜の小屋といえば、今から6，7年前、OB 数人での恒例の春山合宿で、加賀禅定道を登り、奥長倉の小屋に泊まって2日目は小桜。ビール、ビールと言いながら小桜平に着いたが、小屋がどこにもない。屋根まですっぽり雪に埋もれているとは想定外で、テントも持たないぼくたちは、仕方なく下山。6時には下りられたものの、山を甘く見た反省しきりの山行であった。

老いのチョンボ

１５期　舟田　節子

（内容は『ネパール展始末記』最終章、「おまけのゴタゴタ話」の続編です。会報発行が延期になったことで、その後をお伝えできることになりました。ページ占有が申し訳ないですけれど、ＯＢならこそ読めるとっておきの話です。）

「うん？あれ？何これ！ここの３行まるで一緒だよ！」

それは越前海岸の高須山に向かう途中の車の中。平成２０年１月２０日のことだった。ちょっとした勘違いで日曜日がフリーになった舟田夫婦は「越前海岸へ水仙を見に行こう」「ついでに近くの山に登ってこよう」と話がまとまり炬燵を抜け出した。そして越前海岸の山が紹介してあるガイド本２冊を選んでザックにほうりこみ、南下していたのだ。

なおも２冊の照合を続ける。３行だけではない。福井Ｓ会の『新・登ってみねの福井の山』のガイド文から個人感想部を除き、『旧版分県ガイド　福井県の山』から導入部を外せば、ガイド文の８割方が同じだった。

『新・登ってみねの福井の山』は平成４年４月発行。そして『旧版分県ガイド　福井県の山』は平成８年７月の発行で、あの著名なＭ氏が担当している。その人が盗作？

高須山だけを、調査の手が回らなくなった結果やむなく引用したのだろうか？しかし、飯降山、吉野ガ岳、権現山…ことごとく同じだ！ドッキン、ドッキン、鼓動が激しくなる。

こんなことって…誰も気付かなかったのだろうか。私はともかくとして、福井の誰も、そして盗作された福井Ｓ会も気付かなかったのだろうか？！

私は『分県ガイド　石川県の山』の共著者になってからも、他の人はどう書いているかと気になって、同種ガイドを買ったり、立ち読みしたりしたゾ。どのコースを紹介しているのか、表現に苦労した所はどう書いているのか、気になったゾ。そして他人はともかく、自分が書いた物はちょっとアレンジしてあっても気付くものだ。

ここまで丸写しなのに、「自分の書いたのと同じじゃないか！」と誰一人言い立てなかったのか？！

夫にも「見て、見て」をやると「こりゃあ、ひどいわ」と見比べていたが、「そんな気持ち悪いもん、ほかっとけや」と言った。

翌日も気になってたまらず、２冊を並べる。そしてまったく同じ場合は赤ペン、杉林がスギ林とか、２文が接続詞で１文になったり、その反対であったりを青ペンと分け、傍線を引いていった。三の峰、荒島岳、赤兎山などの書くことのある有名山数山を除いた、ほとんどのページが傍線で埋まってしまった。

これは犯罪だ。

ほんとにほんとに誰も言わなかったのか？それとも私が巻き込まれているカリスマ老害のように、圧力がかかって封じられたのか？誰もが目をつぶる状態になっているのか？

１月２４日、巻末を見て福井Ｓ会編集責任者に電話をかけた。自分は『分県ガイド石川県の山』の共著者の舟田だと名乗った。

「丸写しをされているようです。あるいは断り書きがなくても、口頭で使わせて頂くとＭ氏から話があったのでしょうか」

彼は福井弁丸出しで、まずムッとしたように答えた。

「わしらは自分達で調べて書いとるから、他の本なんて真似たことはない。だから見比べたこともない」

「そんなことは初耳や。これまでには『絵地図を看板に使わせてほしい』の連絡をもらって、『使って頂けるのは光栄。どうぞ』と返事したことはあるが…。Ｍさんからは聞いていない。わしはＭさんは知っとるし、話をしたこともあるが、あのＭさんがかいね…」

と絶句。

「わしらも調べてまとめるのは大変やった。ほやからＹ社の話を聞いた時には、Ｍさん一

人でできるがかいなとも思うた。そやけど、買ってきてまで比べようなんて思わんかった。図書館へ行って調べてみるわ」
翌日私は、特に丸写しのひどかった１０山あまりをコピーして送った。これへの返事はなかった。

一方私は去る１１月末にＹ社に問い合わせを出していた。
「自分は新・旧２版の分県ガイドの共著者。新版では最多コースを担当し、掲載写真も最多を担当の立場で問い合わせている。実は当会はＨ氏の退会により一年前に分裂している。経緯上こちらが会名を踏襲し、執筆割合もこちらが70％を占めることになる。分県ガイドにはどのような契約書が交わされているのかを伺いたい」

他の２名はとっくに諦めていたようだった。私は、戦いもしないで、みすみす名前をすり替えられるようなことは受け入れられない。下請けといっても、誠意も時間もかけたのだ。削るなら文章も写真も一新せよを主張するつもりだった。それにはまず契約書を確かめなければならない。まさか、「エベレスト見に行くモン！」の出版契約体験が、こんな場面に生きるとは思わなかった。しかし自分はＨ氏に対抗できる実質キャリアを持たない。返事は期待できなかった。
それなのに１０日後、メールが来た。「事実関係のみですが①出版契約は結ばれていない②Ｈ氏個人に支払いは行われた　　以上です」
感謝とともに「今後のこともあるので、文書回答をお願いしたい」と返信した。それへの返事はなかった。
こんな内紛で、しかも相手は圧倒的キャリアのＨ氏。誠意も時間も吸い取られて、それが相手の箔になって返される。そうやって会の実績を独占してこられたから、彼は横暴をやめない。どんな卑怯をやっても彼が優勢になる。パワーハランスメントが行われても、それが外へは正当で通っていく。山でこんなことが行われるなんて…。
しかし紙爆弾が落とされるたび、私達は結束し心を通わせることができた。自分にとっての山とは、仲間とはを問い直すことができた。協力しあっての会報新生１号の完成が近かった。それでよしとしなければならないのだろう…。
そんな時の、隣県の盗作発見だった。

翌週さらに越前海岸の金毘羅山に登りに行った。そこが一番丸写しがひどかったからだ。そしてもっとひどい事実を知ることになった。
真似られた本が所用時間を反対に掲載しており、そのまま盗用されていた。４枚の写真は車から撮れる範囲のもので、本来なら優先となるはずの頂上の金毘羅宮、頂上付近から見える海岸風景の写真がなかった。Ｍ氏は登っていない！だからガイドは誤植込みで丸写しになったのだ。ひどい！
調査して最新情報を載せるのがガイド本の契約。そのことで著作料は払われ、読者も代価を払う。信じて登る不特定多数の読者がいる。その人達の命がかかっている。
しかも…Ｍ氏は単に隣県のトップであっただけではなく、Ｈ氏を日本山岳会に推挙した恩人だった。

これで勝てる！老害の動かぬ証拠をつきつけられる。山の神様はいらっしゃるのだ！山を人の欲で汚すな…と、そうおっしゃっている！
Ｙ社に盗作を知らせるキーを打つ手がまさに震えた。すぐ「被盗作本をお貸し頂けるでしょうか」のメールが来た。
そして翌日には疲れた声での電話が入った。
「Ｙ社のＡです。盗作でした。新版も旧版を引用していますので盗作となりました。あのＭさんが…なんでこんなことを…」続いて
「実は分県ガイドは重版の予定です。文書回答ということではなく、共著者各自と個別に契約をするということでよろしいでしょうか」
夢心地で受話器をおいた。

こんな展開になるとは…シナリオだってこんなにうまく書けやしない！出版以来、盗作に気付いた人は大勢いたはずなのだ。それなのに誰も通報しないし、できなかったのだ。両本とも絶版になり、もう埋もれてしまう事実だったのに、今頃私の前に転がりでてきた…。

１月20日がフリーになった勘違い。たまたま手にした２冊。Ｙ社と先にコンタクトをとっていたこと。そして分裂前なら、私がＭ氏の盗作を告発できるはずがなかった。どれが欠けても、埋もれたままで終わる盗作だった。

きっと山の神様は「正せ」とおっしゃっているのだ。私が巻き込まれた騒動さえも、このために…。（どう非科学的と思われようと、そうとしかいえないのです。そう流れていったことが、今でも信じられません）

私の足は次に新聞社に向かった。

この事件の当事者は、福井Ｓ会と、Ｙ社と、Ｍ氏であって、私ではない。しかし今マスコミを賑わせている食品疑装のように、道義的責任は問われるべきだ。一般大衆が本を信じて買っている。隠蔽して済むことではない。

そうすることで、間接的に横暴へのパンチを食わせられる。動かぬ証拠を手にした今しか、反撃できるはずがなかった。反撃とは、Ｈ氏が潰そうとし、ガイド本著者からも外そうとかかっている私の名前、著者舟田節子を、前面に出すことだった。神様がここまで応援してくださっているのだと、躊躇なく応接室に座り、２冊を並べた。

福井Ｓ会は取材を断り、Ｙ社はノーコメントを通し、Ｍ氏が認めて（担当記者は「まるで罪の意識がないというか、あっさり認めましたね」と資料返本時に言った）事実確認ができたとして、大きく扱われる記事になった。（Ｙ社には取材が行く旨伝えてあった）

その後もＨ氏の紙爆弾は続き、その中で私は「ひとでなし」と罵倒されている。当方の会長には「Ｍ氏に謝りに行け」の「汚された会名に未練はないので賞状をとりに来い」の、「Ｙ社と新聞社には抗議文を送っておいた」の、「第２次○○会を名乗ることを断行する」のなどが送付されている。「ほうっておこう」と誰も返答してはいない。

その紙爆弾から、Ｍ氏が「末尾に福井Ｓ会の協力を得たことを書き記したが、編集の段階で抜けた。校正の時に気付かなかったのは私のミス」と答弁しているらしきを知った。当事者間

北陸中日新聞　2008年(平成20年)2月9日(土曜日)

地元出版本と文章そっくり

山と渓谷社「福井県の山」

旧版、10以上の山　執筆者「参考に」

山と渓谷社（東京）発行の「分県登山ガイド　福井県の山」の旧版（一九九六年、絶版）に、福井山歩会発行の「新・登ってみねの福井の山」（九二年）と酷似した文章があることが分かった。二〇〇七年発行の新版にも、やや似ている文章が一部残っている。「分県登山ガイド　福井県の山」執筆者の日本山岳会福井支部長(七〇)は「参考にした。盗作したつもりはないが、軽率だった。新版は問題ないと思っている」と話している。

「石川県の山」（山と渓谷社）の著者の一人、舟田節子さんが指摘した。旧版、新版とも参考文献、引用文献の記載はない。

旧版では福井県内の五十二の山を紹介。うち、十以上の山の記事に「新・登って―」の記述と似ている文が掲載されていた。福井市にある金比羅山（こんぴらさん）では、約五十行の記事のうち約三十行がほぼ同じ文章になっている。

また、舟田さんによると、「新・登って―」で誤っていたコースの所要時間が、旧版で同様に記載されているという。

新版は旧版と一部の山を入れ替え、計五十四を紹介。一部に「この先はなだらかな尾根が頂まで続き、のびのびと歩ける気持ちのよい道である」など、「新・登って―」と同じ形容詞が同じ並びで出てくる文章がある。

支部長は「正確を期そうと参考にした。その上で、自分が二度も三度もその山を歩いて文章を書いた」と説明。

福井山歩会の執筆者は「古い本なので事を荒立てたくない」と話している。

他のガイド本と酷似した記述があった「福井県の山」（右が旧版）

で、そのようにご老体の名誉を守り、著作料や違約金のやり取りが行われ、解決されたのだろう。

Ｙ社からは「５月中旬には書式が上がってくるので、個別に契約を進める」「当方はＨさんはＨさん、舟田さんは舟田さんで話を進めていく」「分県シリースは大切にしていきたい本なので、今後もきちんとお願いしていきたいと思っている」との電話があった。世代交代の時期がきていることをＹ社も察知しているのだ。

戦いぬいた自分を誉めたい時間が流れたあとに、ああそうだったのか…の霧が晴れていくような時間に浸っている。

全県を網羅した分県シリーズは、Ｙ社の発行本の中でもきわめて「社会性」のある書籍で、その著者になれることは、いわば山家の勲章なのだ。Ｈ氏の業績なくして受けることはなかった。すみやかな世代交替も可能だったのに、みっともない世代交替になってしまった…。

しかし、このトラブルがあるまで、自分は山に行ければよいで登っていた。周りともあたりさわりなく付き合っていた。紙爆弾が投げ込まれるたび結束し、自分にとっての山とは、仲間とはを真剣に考えた。すんなり世代交替が進むより、これらが実は必要なことだったのかもしれない…。

「すみやかな交替」など思い入れ強いＨ氏にはどだい無理なことで、こんな修羅場も結局は通らざるをえなかったのかもしれない。Ｙ社という外部が私達を認めるという出方をしてこなければ、到底受け入れられない（本人はまだ受け入れてはいない）ことであったのかもしれない。

個別契約が済めば、70％を占める私達が有利に立てる。それからなら、みっともない本にはならないようにの歩み寄りがやれるかもしれないが…壊れていく（？）時計の進み方はわからない。

老いのチョンボ…今回の特集名から表題としてみた。他人事ではない。これから自分だってどんな老いに直面していくのかはわからない。健康面の不安はもちろんだが、「頑張る」が権勢欲につながり、周囲に迷惑をかけたり、次世代を潰す行為に走ることであるなら、何事もほどほどがよさそうだ。

９年前発行のやまざと１５号の特集「山の語り部に聞く」のＨ氏の項の最後…

さてＨさんには、いやＨさんなれこそ、これから「老い」へのチャレンジが始まる。（中略）彼のチャレンジに同行しつつ、「その後」のインタビューも心に秘めて、人生を味わっていきたい。

それはおべんちゃらでもなく、当時の本心だった。しかし、Ｈ氏は自ら退会宣言前の５月、突然副会長３名を指名した。その一人の私には面前であたかも会員名簿を委ねるふうに大封筒を渡したのだが、実際の中身は新聞掲載用の原稿３本のつき返しで、罵倒文が添えられていた。つまりはどうなるのかと、解散しがたい会員達に「おい、原稿書かんか？なに、簡単やわいや。手伝ってやるし」と、にやにやと声を掛けまわっているＨ氏の姿があった。

そうやれば尻尾を巻いてくるかと様子を見た３ヵ月後に、それなら一挙に踏絵をさせるとばかりのボス退会、新会設立が起こったのだ。もうかつてのように自費出版団体ではなく、Ｙ社から受託を受ける団体に昇格できていたのに、それを忘れて、単に改称したで通ると世間や私達を甘くみたのだ。

たぶん、やはり彼は父親に継ぐ私の師といえる人なのだろう、晩年も含めて…。それこそ身を挺して、「老い」を教えてくれたのだろう。

今はそう書き留めるしかない…。

今でも忘れられない私のチョンボ

22期　森　恵利子

それは１年の終わり頃だったと思う。白山の御前峰に立つはずのPWだった。白峰まで着いたところで、おなべのふたがないことがわかった。私のチョンボだった。

民家の玄関先にリュックを積み上げさせて頂いて、翌日、出直すことになった。しかし、翌日行ってみると、なんと私のリュックが忽然と消えていたのである。一番上に積み上げられていた、まだきれいでコンパクトなキスリング。中には、みんなの残金まで入れたままだった。

「誰かが来て持っていった・・・。仲間の人かと思った。」申し訳なさそうにおっしゃる、屋根を貸してくださったおうちの方を責められるはずもなかった。自分を悔やむばかりだった。

警察にも行ったと思うが見つからなかった。山行も当然取りやめ。悲しい悲しい帰り道だった。

後日、１年上の学年の升田さんが、困っとるやろうとキスリングなど一式をくださった。私のキスリングはその日からＭサイズのものになった。パッキングは難しく、かつぎにくいこともあった。でも、ほんとうにほんとうに助かりました。

みんな、ほんとにごめんなさい。そして、たすけてくださってありがとうございました。

その他にも，秋の医王山、上高地・・・と、書ききれないくらいのチョンボがありました・・・。当時のみんな、ごめん。改めてお詫びします。

チョンボしなくてよかったこと　～頂上目前の下山～

26期　畠山　潤

雪山でテントを忘れたり、標高差３００ｍを滑落したり、現役時代は遭難一歩手前のチョンボもありましたが、判断ミスしなくて良かったと今でも思うのは３年の春山合宿で笈ヶ岳を目指した時です。

アタック前日の吹雪で１ｍ近い降雪がありましたが、当日は寒気が残って風が強かったものの快晴。チーフリーダーだったボクは頂上に行きたいと思いつつ、何でこんなに天気が良いのに頂上に向かわないのかとのメンバーの視線を感じつつ、雪崩の恐れがあるとして大笠山に登っただけで引き返したのでした。

あれから４半世紀近く経って数々の雪山経験を積んだ今は、あの時行かなくて良かったと断言できます。

ただ、今やっている単独の山スキーだったら、雪をなだめながら、安定したルートを探りながらして登っているでしょうね。笈ヶ岳頂上から千丈平への北面の滑降はそれだけの魅力があります。チョンボしなくて良かった、という思い出です。

新宿駅まで乗り越したリーダーの山靴

20期　久富　象二

１年生の時の夏合宿。南アルプスの北部、甲斐駒ケ岳や北岳をメインとするコース。初日は電車で金沢から甲府へ。最初空いていた電車は途中ひどく混んできた。朝早かったため皆寝入ってしまった。慌てて降りたった甲府駅の惨状。紛失物、リーダーの山靴、鍋類、コッフェル。電車の終着駅、新宿からは幸いに山靴が戻ってきた。鍋類の買出しのため、小雨降る甲府で沈殿。行動計画に基づいてこの時点で甲斐駒はカット。以来、私は現在まで甲斐駒には登っていない。

ポールを忘れたこと、そして最大のチョンボは…

43期　杉村　明慶

２回生のときの合宿で、ポールを忘れたことがあります。

自分にとって、ワンゲルとは何か…。今でも時たま考えることです。私の場合、卒業後２、３年のときに氷見にＯＢとして集まりに行った機会があり、このとき、初めて自分にとってワンゲルとは何かが少しはっきりしました。つまり間をあけて再び参加し、初めて分かったことがあったのです。

時間が経たないと分からなかったこと…、これも、チョンボかな……。

■うれしいホット・ニュース■

12期大出松世さんが会長を務める「石川県・金沢女性理科研究会」、

第39回中日教育賞を受賞 ―子どもたちの可能性信じて―

07.10.22
北陸中日

「子どもが創る理科・生活科」の授業実践研究

石川県・金沢女性理科研究会

男性教諭に任せがちだった理科の授業づくりを率先していこうと、数人の女性教諭が集まり一九七八（昭和五十三）年に研究会を設立。現在は金沢市や市近郊で勤務する小学教諭四十八人が「理科や生活科が大好きな子どもを育てたい」と授業研究に打ち込む。

教諭同士厳しい指摘

月一回の定例会では授業案の構成や子どもから答えを引き出す問い掛けの仕方、評価方法など会員同士できめ細かく問題点を洗い出す。厳しい指摘はしょっちゅうだが学びの姿勢は誇りの一つ。大出松世会長（金沢市立西小学校長）は「揺るぎない信頼関係がある。厳しいからこそ、ここまで続いたのでしょう」と話す。

会員は、勤務校で指導的な立場についたり、県内の授業で使われる学習帳の編集に携わったりと活躍の幅を広げてきた。大出会長は「それぞれの学校や地域で理科、生活科の教育向上に貢献していきたい」と意気込む。

今だから笑える30年前のチョンボ

23期　鳥越伸博

1.　テントのグランシ（グランドシート）を忘れたこと

奈良へロードに行ったときのこと。初日のテン場について、さあテント設営。テントを出して、ポールを出して、グランシを出して…。
「オーイ、早くグランシ出せよ。」
「…。」
「グランシは？」
「忘れたみたいです…。」
たまたまその時はフライシートを持っていったので、フライをグランシ替わりに使って何とか４日間凌ぎました。
ロードだったのと４日間１回も雨が降らなかったのが幸運でした。

◆◆◆

2. 途中でポールを１本なくしたこと

夏合宿も終盤戦、７泊目か８泊目のテン場についてテント設営をしようとしたときの事。いつもの通りテントを建てていくと、ポールが１本足りない。そんなはずがないだろうと確認するがやっぱり１本足りない。途中で落としたかもと少し捜しに戻るが見当たらない。しょうがないので食缶をポールの足りない部分の代わりにして、テントを建てました。
格好悪いので、リーダー側の入り口は絶対に開けないことにしました。

◆◆◆

3. 山靴を持ってくるのを忘れたこと

ゴールデンウィーク、残雪の犀奥ＰＷ。部室を車で出発して、鶴来を過ぎて内尾（今のセイモアスキー場）まで。ザックを降ろして、山靴に履き替えて、さあスタートしようとしたその瞬間。
「部室に山靴忘れた！」
なんとリーダーが山靴を忘れてきてしまったのです。連絡先の人間に電話して山靴を持ってきてもらって１～２時間遅れで何とか出発できました。ちなみにこのＰＷのリーダーは自分です。